

清泉女学院

地域連携センター報

第16号

(2023年度)

Seisen Jogakuin College

Nagano Japan

こころを育てる



SEISEN JOGAKUIN COLLEGE

清泉女学院大学
清泉女学院短期大学

目 次

巻頭言	センター長	塚原 成幸 …… 1
1. 地域連携センター活動報告		塚原 成幸 …… 2
(1) 地域連携センター運営委員会		塚原 成幸 …… 2
(2) 長野市連携事業		事務局 …… 3
(3) 千曲市連携事業		事務局 …… 5
(4) 信濃町との連携事業		事務局 …… 6
(5) 長野商工会議所との連携事業		キャリア …… 6
(6) ながの農業協同組合との連携事業		事務局 …… 7
(7) 長野信用金庫との連携事業		事務局 …… 7
(8) 長野県議会との連携事業		事務局 …… 7
(9) 地域連携プロジェクト～地域活動支援～		
①台風 19 号災害による被災者への支援活動（災害公営住宅美濃和田団地）		齋藤 正子 …… 8
②千曲市子育て支援・発達支援連携プロジェクト		山崎 晃史 …… 9
(10) 復興支援プロジェクト		塚原 成幸 …… 11
2. 生涯学習部門活動報告		事務局 …… 12
(1) 公開講座		
①人々は何を想って唄ってきたか～アメリカン・フォークソングの世界～		中村 洋一 …… 13
②ストリートチルドレンと呼ばれる子どもたち		小松 仁美 …… 15
③特別講演会『安田菜津紀講演会』		塚原 成幸 …… 16
(2) 出張講座		
①こどもの人権と不適切な保育		長谷川 孝子 …… 17
②音楽リフレッシュ		山崎 浩 …… 18
(3) 生涯学習講座実施状況		
①公開講座実績一覧		事務局 …… 20
②出張講座実績一覧		事務局 …… 22
3. 地域活動部門活動報告		塚原 成幸 …… 24
(1) ボランティア活動報告		
①人間学部文化学科 1 年 T. A.		…… 25
②人間学部心理コミュニケーション学科 1 年 T. M.		…… 27
③看護学部看護学科 1 年 K. M.		…… 29
(2) Let' s try ボランティア活動支援		
①チャイルドラインながの受け手ボランティア		…… 34
②SEISEN ひょうしぎの会		…… 35
(3) ボランティア活動参加状況		事務局 …… 36
(4) ボランティア活動実績		事務局 …… 38

巻頭言

地域連携センター長 塚原 成幸

地域とのかけはしを目指して

新型コロナウイルス（COVID-19）による混乱が収束傾向となった今年度は、徐々に様々な交流が再開された1年であった。令和5年の5月には新型インフルエンザ等感染症（いわゆる2類相当）から5類感染症になったことで、一旦休止していた多様な活動が restart され、特に夏以降はほとんどのイベントや行事の開催が「制限なし」となった。

そうした状況を受け、本学の出張講座や公開講座、さらに学生が自主的に取り組むサークル活動やボランティア活動なども少しずつ活気を取り戻していった。具体的な実績に関しては後述するが、講座やボランティア活動の数だけ、地域の方々との出会いと体験の共有があり、その一つ一つが本学にとってかけがえのない宝であると感じている。

本センターにおける今年度のトピックはやはりアフターコロナのボランティア活動再開である。昨年度までは諸々の制限によってボランティア活動の問い合わせも減少していたが、今年度は周辺地域からの要望も増大し、ボランティア活動に従事する学生数も増加に転じた。（前年度比）総数としては、未だにコロナ前には及ばないものの、確実に復調傾向と言えるだろう。

現在、本学は2025年（令和7年）度に予定されている大学の名称変更や男女共学化、そして新学部の開設に向け改革に着手している。新しい「SEISEN」の学びが問われる中、地域と本学をつなぐ架け橋として、新生・地域連携センターの動静が今問われている。

1. 地域連携センター活動報告

塚原 成幸

今年度(2023年度)は、本学が策定した第三期中期計画(対象年度:2020年~2024年度、以後、中期計画)の四年目にあたる年度であった。中期計画の中で本センターが掲げた主な目標は、1.「知の拠点として地域の信頼を高め、地域の発展に貢献すること」、2.「建学の精神を具現化し、その意義を強化すること」、3.「生涯学習やボランティアなど積み重ねてきた実績をさらにレベルアップさせること」の三点である。いずれも本学がこの地に存在する意味を明確にする重要な目標であり、今年度もその基盤を整備する重要な年度と位置付けていた。しかし、中期計画の開始とリンクして新型コロナウイルスの感染症が拡大し、実際には2020年~2023年度までは、地域に対する様々な活動は制限あるいは縮小せざるを得ない状況が続いた。このような中、今年度に入ってようやくコロナの影響も落ち着きを見せるようになり、徐々に本体業務も復活するようになっていった。

本センターの活動としては、本学の地域貢献の一つとして定着している公開講座も年間を通して実施(春学期は全16講座、受講者は202名。秋学期は全14講座、受講者は112名)することができた。講座数、受講者数共にコロナ過前には及ばないものの、昨年よりも確実に増加しており、今後の発展が楽しみである。

さらに、長野県および隣県の教育機関(高校および中高一貫校を除く)や地方自治体および公的な性格を持つ機関・団体・施設などを対象とした出張講座も実施(全18講座)することができた。

(1) 地域連携センター運営委員会

本学の第3次中期計画の目標を検討・実行するため、地域連携センター運営委員会を計10回開催した。

「地域活動部門」(ボランティア・イベント・地域との交流活動など)と「生涯学習部門」生涯学習講座・公開講座・講演会などの事業は新型コロナウイルスが5類に移行されたため、今年度はほとんどの事業が計画通り実施できた。

なお、地域連携センターが通常担っている主な事業とその実現のために連携協定を締結している団体は以下の通りである。

○地域連携センターの主な事業

①地域との連携拡大および新規事業に関わる事業

連携団体との連携協定に関する事業、及び地域の課題解決・情報交換・交流を積極的に行う。

②地域連携プロジェクト

地域連携活動の推進のために「学部・学科の教育・研究と地域が有機的につながり地域貢献を推進すること」として、教員と学生が協働する活動費の一部を支援する事業。

③学生のボランティア活動に関わる事業

地域から寄せられたボランティア募集情報を学生に提供。また、学生の自主的な地域活動を支援する目的で活動資金の一部を支援する助成金制度「Let's Try ボランティア支援」の募集及び調整を行う。

④生涯学習講座事業

公開講座・授業開放・出張講座・映画上映会等の企画・情報発信・受付・実施等広く市民に提供する各種講座を開講する。

○連携協定を締結している団体は、以下の通りである。

- ・自治体：「長野市」「千曲市」「信濃町」「小川村」
- ・その他の団体：「NPO 法人夢空間松代のまちと心を育てる会」
「NPO 法人長野市障がい者スポーツ協会」
「長野商工会議所」
「ながの農業協同組合（JA ながの）」
「長野赤十字病院」
「長野信用金庫」
「長野県議会」
「特定非営利活動法人ながのこどもの城いきいきプロジェクト」
「長野市ガイド協会」
「認定特定非営利活動法人長野犯罪被害者支援センター」
「公益財団法人ながの観光コンベンションビューロー」

(2) 長野市連携協議会

長野市との連携協議会は、昨年につき 2023 年度の連携事業実績の確認と次年度新規連携事業の提案は書面にて行われた。

2023 年度継続を確認した連携事業

【テーマ研究型事業・人づくり】

〈短期大学〉

1. 公共保育所等におけるボランティア事業
2. 幼児教育推進のための事業
3. 児童館体験学習事業

〈大学〉

1. 教育臨床演習事業
2. 心の教育推進(中間教室)
3. 学習チューター
4. 若者のライフデザイン形成支援事業
5. 男女共同参画啓発講座の開催
6. 長野市の公共施設を考える学生ワークショップ
7. 多職種連携と地域フィールドワーク
8. ながの減塩プロジェクト

〈全学科〉

1. 市立長野中・高との連携
2. 地域課題解決のための官学共同研究事業
3. 就業体験生(インターンシップ生)事業
4. 清泉女学院公開講座
5. 清泉女学院出張講座(公民館講座/生涯学習センター講座/市職員のための夜間講座)

『地域振興、相互協力・協力事業』

〈大学〉

1. 若者等移住・定住情報発信事業
2. 長野市立博物館における文化財レスキューおよび長野市内における仏教美術資料調査事業
3. スマートシティ NAGANO 推進事業
4. 長野市復興祈念事業
5. もんぜんパートナーシップでの長野駅東口周辺の美化活動(看護学部)
6. 伝統文化の継承

〈全学科〉

1. 放課後子ども総合プランのアドバイザー登録
2. 国際交流イベント実施事業
3. スポーツ大会運営支援
4. 選挙関連業務への協力
5. 小中学生向けキャリア教育
6. 附属機関への参画等

2024年度に新規連携を希望する事業

1. 若手 IT 人材育成プロジェクト

2. スポーツを活用した地域活性化の担い手について、本学での人材育成の可能性について意見交換を行う

(3) 千曲市連携協議会

2023年度の千曲市との連携協議会は12月12日清泉女学院大学上野キャンパスで開催した。コロナ禍以降4年ぶりに対面での協議会となり、継続する事業と新規に連携を希望する事業の確認をした。

2023年度継続を確認した連携事業

1. 企業・自治体訪問事業
2. インターンシップ事業
3. ボランティア事業
4. 清泉女学院出張講座
5. 千曲市小学校の英語充実ボランティア
6. 中村洋一ゼミでの活動支援

2023年度地域連携プロジェクトで実施した連携事業

1. 姨捨棚田と月の都千曲 - さらしなルネッサンス 月の文化講座 -
2. 千曲市子育て支援・発達支援連携プロジェクト
3. 千曲市 地域活性化プロジェクト

2024年度に新規連携を希望する事業

1. 保育士の確保
2. (仮称) 屋代スマートICを活用した魅力のあるまちづくり事業
3. 戸倉上山田温泉まちづくり事業
4. 千曲市地域ストーリーづくり事業

(4) 信濃町との連携事業

信濃町と相互の発展に資するための包括連携協定を締結し、10年目となる2023年度に連携した事業は以下の通りである。

清泉女学院大学心理コミュニケーション学科の授業連携

・心理基礎演習Ⅰ（田仲）

心理コース2年生が、信濃町が展開する「癒しの森」事業に参加し体験学習を行うとともに、指導者であるメディカルトレーナーへのインタビュー調査を通して、森林セラピーの効果や参加者とのコミュニケーションのあり方を学ぶことを目的として行われた。

受講した学生は、信濃町役場産業観光課職員の方々から地域で活躍することの意義を学び、地域貢献への意識を高めることができた。

(5) 長野商工会議所との連携事業

長野商工会議所と相互に協力して一層の地域発展に貢献する人材育成を目的に包括連携協定を締結し、9年目となる令和5年度は、連携事業として「キャリア・デベロップメント展開」の授業の中で「企業人と女子学生との座談会」を11/14に実施した。当日は、本学学生約100名と商工会議所会員企業16事業所が参加し、仕事のやりがいや生き方、地域との繋がりについて積極的に質問や意見交換を行い、学生は理解を深めた。

8月～9月には大学3年生2名、2月～3月には大学3年生1名がそれぞれ1週間のインターンシップ（就業体験実習）を行い、実習学生は事業内容の理解のほか、社会人として求められる適性を知り職業観を高める貴重な機会となった。

また2023年（令和5年）第117回えびす講花火大会では、人間学部文化学科3年生川北ゼミ（公共政策）が特別大スターマインの企画に取組んだ。2023年は、長野市茶臼山動物園の開園40周年記念であることから、「茶臼山動物園 40th Anniversary」をテーマとした花火を考案。事前学習として、茶臼山動物園を見学し、長野商工会議所や信州煙火工業のご担当の方から話を伺い、曲の選定や、花火のコンセプトを考えていった。この活動を通して、花火大会の歴史の深さや、花火大会は地元企業に支えられていること、地域に対する地元企業の想いを学ぶことができた。ひきつづき、長野商工会議所と連携して、地元企業の魅力を発信していきたい。

(6) ながの農業協同組合との連携

ながの農業協同組合様と包括連携協定を 2017 年に結び、地域農業の振興に向けて協力をしています。残念ながら 2023 年度は連携事業を行わなかったが、長野県農業協同組合中央会の所属の卒業生に業界・職業研究セミナーに参加いただいた。今後は学生のインターンシップや就職活動などで連携を強めていきたい。

(7) 長野信用金庫との連携事業

就職活動中の短大 2 年生と大学 4 年生の学生が、地方金融機関の社会的・経済的役割を理解し、また地域に根差した中小企業を学ぶ機会として、5 月 10 日開催の「第 20 回ビジネスフェア 2023」に参加した。

公共政策やまちづくりを学ぶ川北ゼミの 4 年生はブースの運営を担当した。ブースを訪ねてくださった方には、文化学科の学びの特徴や、川北ゼミで取組んだ長野市役所と連携したプロジェクトの成果について話をした。就活イベントでは見ることのない、地元企業をたくさん知ることができたり、色々な社会人の方から就活のアドバイスを頂いたり、たくさん学びがあった。

また、長野信用金庫が北信地域で起業・創業を目指す人をサポートする『しんみせチャレンジ 2023』では、大学文化学科の教員 1 名が、スタートアップ資金最終選考委員として参加した。

同じく、起業を予定している人や起業して 5 年以内の人を対象に、起業・創業する上で必要となる実践的な知識を学ぶ『創業カレッジ』にも大学文化学科と短大国際コミュニケーション学科の学生が参加した。また、本学の「金融リテラシー」の講座に、講師としてお越しいただいた。

(8) 長野県議会との連携事業

大学及び短大の持つ研究成果を地域課題の解決に結びつけ、県民のニーズに合った政策形成や調査・研究を進め、魅力ある地域づくりの推進や人材育成に資するに取組を行うことを目的として、令和 2 年 10 月 24 日に長野県議員会館において、長野県議会と包括連携協定を締結した。令和 6 年 2 月 9 日（金）県議会議長、副議長、広報担当の議員や地元選出の議員らが地域住民の方々や次代を担う若い世代の皆さんと意見交換を行う「こんにちは県議会です」がオンラインで実施された。今年度は本学から人間学部文化学科の 3 名が参加し意見交換を交わした。

(9) 地域連携プロジェクト～地域活動支援～

清泉女学院学部・学科の教育や研究及び学生と地域が有機的につながり、地域貢献を推進する。さらに、地域連携事業開発のノウハウを本学が組織として形成し、今後の地域連携活動の推進を図ることを目的とする教員向けの助成金事業。

自治体・企業・NPOなどの地域団体と協働して行う連携事業であり、営利に偏ることなく、地域の振興及び発展、教育及び研究の充実に寄与する活動であること。また、学生と共に実施し、地域社会に貢献する人材の育成に寄与する活動であることを条件としている。今年度は7件のプロジェクトを採択し、全て実施することができた。

①台風 19 号災害による被災者への支援活動

(災害公営住宅美濃和田団地)

看護学部看護学科 齋藤 正子

1. 活動目的：

- ① 台風 19 号災害による被災者の災害関連死の低減を図る。
- ② 長野市社会福祉協議会と協働して災害公営住宅にて生活する被災者のコミュニティの再建をめざす。

2. 方法・内容：

災害公営住宅美濃和田団地が令和 3 年 11 月に開設され、被災者が入居している。高齢世帯も多く、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、コミュニティの再建に時間を要している。また、支え合いセンターの支援活動が令和 5 年 3 月末で終了となる。令和 5 年 12 月には、サロンを住民が自主運営できるように社会福祉協議会や新団体と活動相談の支援を行った。具体的には災害公営住宅の集会場にてサロンを開催し、被災者 12～15 名を対象とした健康維持・増進の支援活動を行った。具体的には以下の通りである。

<活動日時と内容、活動者>

- ①9月5日(火) 13:00～15:00 おりがみ、風船運動 (教員1名、学生6名)
- ②9月12日(火) 13:00～15:00 おりがみ、風船運動 (教員1名、学生6名)
- ③10月10日(火) 13:00～15:00 ふまねっと運動・フレイル予防(教員2名、学生2名)
- ④11月21日(火) 13:00～15:00 ふまねっと運動・フレイル予防(教員2名、学生3名)

3. 成果または結果

長野市豊野地区の美濃和田団地サロンに看護学生が参加し、健康チェックや健康体操、高齢者でも可能な活動による交流を行った。この活動により、災害公営住宅入居者の被災者の孤立防止やコミュニティ形成の一助になっていたことが成果である。

課題として、サロンの参加者にとって、大切な交流の場となっているが、参加者がおおむね固定化されてしまっている。また、サロンの参加者が高齢化しており、鍵当番やサロンの運営者の担い手が不足していることである。今後の支援方法をサロン参加者および長野市社会福祉協議会はじめ、支援団体と協働して継続した活動が必要である。

学生自身の学びの成果は、災害サイクルの慢性期における復興状況や被災者の生活状況およびニーズを理解できたこと。本活動を通して、多職種によるチーム活動の実際を見て、被災者のコミュニティの再建の重要性について学ぶ貴重な経験の場となったことである。

4. 地域連携事業開発へのモデル事業としての意義と成果について

台風19号災害により、災害公営住宅には被災した世帯が入居しており、高齢世帯が多く、またコロナの影響もあり、コミュニティ形成が課題となっている。

地域連携事業開発へのモデル事業としての意義は、復興支援は、被災者の自立した生活を目指す。災害復興住宅の入居者は高齢者が多く、災害関連死のリスクが高くなる。そのことを予防するために、孤立や孤独を防ぎ、コミュニティの形成および継続支援を行ったことである。また、学生がサロンに参加することで、高齢被災者と学生の世代間交流の場となり、コミュニティの再建に寄与していたと考える。

②千曲市子育て支援・発達支援連携プロジェクト

人間学部心理コミュニケーション学科 山崎 晃史

本プロジェクトは、学生の教育と大学の地域貢献を兼ねながら、千曲市における乳幼児期、学童期に関わる地域連携の強化に資することを目的としている。

具体的には、3年生の専門演習を通じて、学生が千曲市の子育て支援の場でのフィールドワーク（参与観察、聞き取り）を行い、関係機関の特徴や地域課題を把握する。この取り組みを複数年度にわたって実施し、今後、その成果をまとめ、関係者に向けて発信し、地域連携の契機となることを目指している。

進めるに当たっては、千曲市こども未来課の担当者と協議を行い、フィールドワーク先施設を紹介していただき、事前に各施設に話を通していただいた。前年度の専門演習でも千曲市役所の保育、保健、子育て支援、障害福祉の各担当者に学生が遠隔オンラインで聞き取りをしたという実績があり、円滑に話が進んだ。また、稲荷山くるみこども園についても、前年度に学生が保育体験をさせていただいており、こちらも円滑に話が進んだ。

本年度はまず、千曲市にあるこども園である稲荷山くるみこども園のチャプレン（施設併設礼拝堂の聖職者）大和玲子司祭（日本聖公会）を10月23日の授業に招いてお話を伺い、質疑を通して、園におけるその役割を把握した。子育て支援の領域で、通常、聖職者の存在がクローズアップされることはないが、同園では役割を果たしている。大和氏は、キリスト

教を基盤とした保育の姿やチャプレンの役割について話され、自身が以前、看護師を務めていて、人の生死に触れたことが現職へと進む過程に影響しているという趣旨のことも話された。

学生たちは、チャプレンに初めて出会うことになり、終了後に『礼拝などのキリスト教に関わるだけでなく、各クラスの見守りをしたり、ご飯を一緒に食べたりと日常的なかかわりもあることが分かった』、『…保護者や先生とはまた異なる存在であり、第3者としての視点があると子育て支援の幅が広がると思った。…保護者や先生方、チャプレンや地域の方との関わりにより「自分は大切な存在」という実感を、



大和先生による講話の様子

自分たちが大切にされる体験から学ばせているのだと気づいた』、『キリスト教のこども園のイメージは「聖書を読み込んでいる」「キリスト教について学んでいる」というイメージがありましたが、勉強のように教え込むのではなくクリスマスやイースター等のイベントを通して学んでいるということがわかり、自分の持っていたイメージが大きく変わり、とても勉強になりました』などのコメントを寄せている。神に愛されることを日々実感できるように見守る、祈ることを伝える、というチャプレンの姿に気づきを得たようであった。また、日本ではまだ少数である女性司祭の存在に触れる機会ともなった。

この後、訪問先のことを調べる事前学習を経て、子育て支援関連施設のフィールドワークを行った。各施設2名ずつペアとなり2~3回訪問し、参与観察と職員へのインタビューを行った。場所と日程は以下の通りである。

- ・屋代児童センター（放課後児童クラブ）：10月20日、10月27日、11月10日
- ・杭瀬下保育園（保育所）：10月30日、11月6日、11月13日
- ・更埴子育て支援センター（子育て支援センター）：11月6日、11月20日、11月27日
- ・稲荷山くるみこども園（認定こども園）：11月13日、11月20日、11月27日
- ・戸倉児童館（放課後児童クラブ）：11月8日、11月15日

放課後児童クラブでは、隣接する寺院での行事に児童が参加している様子などから地域とのつながりの強さに気づき、児童の主体性を尊重する支援者の姿を観察し、近隣と比して安価な利用料であるという特色を聞き取った。

保育所では、訪問を重ねるとお互いに慣れてきて交流しやすくなることを体験的に理解し、訪問した園が人口増加地域にあり他園の園児が減少しているところ、増加しているという事情を把握した。

子育て支援センターでは、就園前の児童が親と共に遊びに訪れる場であり、保育士が子ど

もの遊びを促しながら、親の相談に応じ、また親同士の支え合いを促す場であることを体験的に把握し、その役割の重要性を肌で感じた。また、就園前の2、3歳でも意思がはっきりしていること、一人ひとり個性があることを驚きと共に報告した。

認定こども園では、年齢別クラスを順次体験することで、年齢による成長の姿を実感し、積極的に学生に接してくる児童の素直さを感じ入り、発達が気になる児童を支えるためにクラスに複数の保育士がいる姿を把握した。

フィールドワーク後の授業ではペア毎に体験したことを発表し、全体で共有した。

そもそもほとんどの学生にとって、支援の現場で児童や親、職員と関わるということ自体が初めてであって、新鮮な体験であった。子育て支援の場を知り、そこに集う人々の姿、その実態を体験的に知ることができたことは大きい。いっぽう、関係機関の特徴や課題の把握となると、そこまで深掘りすることは難しい様子だった。学生にとっては、他と比較考察するだけの情報と経験値がないのでやむを得ない。

また、施設側にとっては、保育実習、教育実習以外の学生のフィールドワーク受け入れがあまり例のないことで、学生への対応の仕方に分かりにくさがあった趣旨のコメントが複数あり、課題である。

今後は、探究したいテーマを学生が自発的に見だし、明確化して、それを深めるという授業の流れを工夫する。また、事前準備の段階で施設と学生間で直接打ち合わせる機会をつくり、フィールドワーク内容のすりあわせを図りたい。

なお、障害福祉の公的な協議会である千曲・坂城地域自立支援協議会との連携も模索したが、具体化できなかった。次年度の展開を目指す。

最後に、いろいろな調整をしてくださった市役所の方や、受け入れて下さった各機関の方々に厚く御礼申し上げます。

(10) 復興支援プロジェクト

2024年1月1日に発生した能登半島地震により、奥能登地域を中心に北陸地方の各地で甚大な被害が発生した。本学でも被災地を支援するため、地域連携センター、学生会、カトリックセンターが協力し、キャンパス内での募金活動を1月末に行った。学生・教職員、カフェテリアなどの業者の方々など多くの方々からの支援金を集めることができた。

学内で集めた支援金は、地域連携センターの今年度の復興支援プロジェクト予算と合わせて、被災地支援活動を行っているカリタスジャパンへ送金する形での支援を行った。カリタスジャパンは被災地の各地にボランティアベースを設置しており、広く支援活動ならびに広く被災された方々への支援関連活動のために活用していただく。

清泉女学院復興支援プロジェクトでは、今後も引き続きできる事から被災地への復興支援活動を続けていく予定である。

2. 生涯学習部門活動報告

事務局

本学地域連携センターでは、地域貢献事業として「特別講演会」「公開講座」「出張講座」を実施している。2023 年度は新型コロナウイルス感染症が計画された5類に分類されたため、講座を制限することなく開催することができた。春学期は16講座、秋学期は14講座開催した。

今年度の公開講座は昨年を上回る年間314名が受講し、文化的な学びのニーズがあることがわかる。特別講演会でも104名の来場者数であり、去年の映画上映会と比べても多くの来場者にお越しいただいた。

出張講座についても、講座によって人数制限はあるもののマスクの着用は任意として歌を歌う講座も開催することができた。「心」や「健康」などをテーマとした講座は依然として地域からの需要がある。

さらに今後は、講座内容の見直しを進めつつ、また東口キャンパスの利便性や上野キャンパスに建設した新しい新演習棟を活かすことで、受講生の増加や満足度向上に注力し、知の拠点としての大学の役割を最大限に発揮し、地域社会に貢献し続けていきたいと考える。



公開講座

「紙芝居でコミュニケーション！！
かみしばい演者養成講座 2024」

公開講座

「新生児蘇生法 病院前コース」



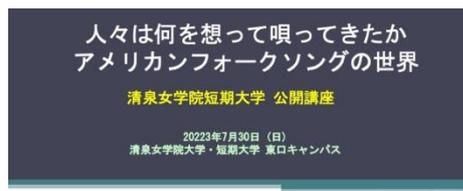
(1) 公開講座

①人々は何を想って唄ってきたか

～ アメリカン・フォークソングの世界 ～

国際コミュニケーション科 中村 洋一

今、世界各地で起こっている諍いごとは、なかなか収まらない。人間は、もともと好戦的な DNA を擁しているのか？ 戦った結果がそれほど、双方に喜びを与えてこなかったことは、歴史が示しているのではないのか、そういうことを学習しないのか？ 幸福を追求すべき宗教が引き金となってしまうことがあるのは何故だろう？



清泉女学院短期大学 国際コミュニケーション科
教授 中村 洋一

個人でできることは少ないと肩を落としながらも、フォークソングには、争いを憂え、戦争に反対するメッセージを伝えるものが少なからずあり、広く歌われてきたことに、少し希望を持つ。2023年度の公開講座「人々は何を想って唄ってきたか ～ アメリカン・フォークソングの世界」では、そのような歌をいくつかとりあげた。本報告では、そのうちの、やや例外的に、直接的に反戦、厭戦を唄ったものではないが、大きな影響を持ったアメリカン・フォークソングのひとつを紹介したい。

"Lorena"という歌は、今から 160 年以上前、1856 年に、オハイオで牧師をやっていた Henry Webster が詞を書き、友人の Joseph Webster が作曲した。

We loved each other then, Lorena, More than we ever dared to tell

And what we might have been, Lorena, Had but our loving prospered well

But then, 'tis past, the years are gone, I'll not call up their shadowy form

I'll say to them, "lost years, sleep on", Sleep on, nor heed life's pelting storms

詞の内容は、作詞をした Henry が大失恋し、婚約破棄となってしまった恋人のことを未だ熱烈に思う気持ちが唄われていて、Western Writers of America という団体が選ぶ Top 100 Western songs of all time に選ばれている。そして、南北戦争の時には、北軍、南軍の別を問わず、兵士達に愛され、唄われていたとされている。しかし、当時の軍の上層部達は、あまりにもロマンチックすぎて、兵士達が家族や恋人を思い戦意を喪失するとして、快く思っていなかった、という話も残っている。戦争の最前線にいる兵士達は、戦いの意味を理解しようとしながらも、本当は争い事に参加などしたくなかったのではないだろうか。

第二次世界大戦の時には、日本でも同じようなことが起こった。高峰三枝子という歌手が唄い大ヒットした「湖畔の宿」(1940年 作詞 佐藤惣之助、作曲 服部良一) は、感傷的な曲調と詞の内容が戦時下の時勢に適さないとして、まもなく発売禁止となったという。

山の淋しい湖に ひとり来たのも悲しい心 胸の痛みにたえかねて

昨日の夢と焚き捨てる 古い手紙のうすけむり

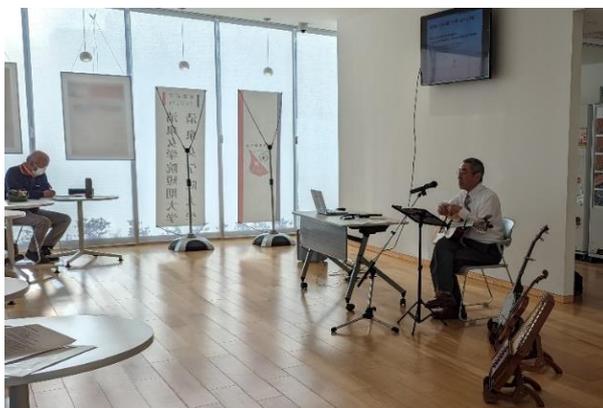
この歌には、日本の、名もなき人達が作った替え歌がある。

昨日産まれたタコの子が 弾に当たって名誉の戦死 タコの遺骨はいつ帰る

骨がないので帰らない タコのかあちゃんせつなあかあろう ...

戦争という大義名分の中で、直接的に歌に託して訴えることもプロテストソング、フォークソングの役割であった。しかし、直接的な反戦を唄う歌詞ではないのに、人々の心を穏やかにする力も、フォークソングにはある。

今後も、アメリカン・フォークソングの世界を紹介しながら、人々の想いに寄り添う講座を続けていければと思う。



②ストリートチルドレンと呼ばれる子どもたち

幼児教育科 小松 仁美

2023年6月24日(土)午後、東口キャンパスにて公開講座を実施した。少人数ながらも、足を運ばれた地域の方々は、「私たちに何ができるのか」という視点で非常に熱心にメモを取りながら公聴された。

明確な定義のないストリートチルドレンという言葉について、用いられるようになった歴史的経緯と現時点での国際的な定義をお話しし、貧困層の子どもたちがどのようにしてストリートチルドレンになっていったかや、そうなった子どもたちがどのように暮らし、薬物や暴力などにより生存が脅かされる彼らがどのように大人になり、あるいは、ならずに命を落としてしまうのかなどメキシコ市の現状を写真を交えて伝えた。

こうした問題状況の解決に向けた調査研究の概要を示し、調査と並行して行ってきた現地での支援経験を伝えながら、問題構造を変えるための社会全体での取り組みと、問題状況に対応する対処療法的な支援とを提示した。

参加者からは、「どうやったらこの問題は解決にむかうのか、私たちの国でできることは何なのか」という質問や、「こういう状況で生きなきゃならない子どもたちがいるっていうことが、とてもつらい。何とかしてあげたい」と感想が寄せられ、講座の終了後も参加された方々が各々に思いを語り合う姿がみられた。

非常に重たいテーマであるものの、学びたいという意欲の強い方が集まり、意見交換のできる学びの多い公開講座となった。



③2023 年度特別講演会 安田菜津紀講演

「紛争地、被災地に生きる人々の声～取材から見えてきたこと～」

幼児教育科 塚原 成幸

本学では、毎年、生涯学習事業の地域発信・特別企画として、映画上映会や特別講師を招いての特別講演を実施している。今年度は、フォトジャーナリストとして国内外の取材活動を積極的に行い、テレビのコメンテーターとしても活躍している、認定 NPO 法人 Dialogue for People 副代表の安田菜津紀氏の講演会を対面形式で行った。

安田氏は長年、世界各地の紛争地域や国内の被災地を訪問し、立場の弱いとされる人々のリアルな声をテレビ、ラジオ、著作を通じて発信している。折しも、10月7日にハマスとイスラエルの軍事衝突が発生し、パレスチナ問題に関心が集まる中の開催ということもあり、県外から聴講した熱心な参加者も見られた。

安田氏は、自らが取材した地域や人々の表情を写真で紹介し、あらためて平和の尊さについて深く考える機会となった。

近年は新型コロナウイルス感染症の関係もあり、講演会や映画上映会の開催そのものが危ぶまれてきたが、開催する映画上映会などには多くの方々が来場している。本学としては、これからも地域にひらかれた大学として、市民の方々に喜ばれ、感動を届けられるような企画を発信していきたいと考えている。

清泉女学院大学・短期大学 2023年度特別講演会

参加費 無料

認定NPO法人Dialogue for People副代表 / フォトジャーナリスト

安田 菜津紀 講演会

紛争地、被災地に生きる人々の声
～取材から見えてきたこと～

高次生でカンボジアを訪れたことを機に「伝える」仕事を志し、各地での取材を続けてきました。戦争が2年以上続いてきたシリアや、軍事衝突を続けたアフガニスタンは、国内外で多くの人が犠牲者を出しています。果たしてそれは、地の柄ごとの、自分たちとは違い問題なのでしょうか？東日本大震災で被災地となった岩手県陸奥市で出会った人々の生き様が、思いもよらない大きな影響を及ぼしてくれました。

取材で撮影した写真と共に、私たちに学べること、何ができるのか、そしてどんな未来を望みたいのかを考えたいと思います。

安田 菜津紀 氏 プロフィール

1967年鹿児島県生まれ。認定NPO法人Dialogue for People「ダイアローグ・フォー・ピープル(D4P)」フォトジャーナリスト、同団体の副代表。16歳のとき「国境を越えて来た」第1巻のライターとしてカンボジアで冒険にさらされた。その後もアフガニスタン、シリア、アフガニスタン、シリア、アフガニスタンで取材し、その取材をまとめた。東日本大震災以降は被災地を中心に、被災地を訪問し取材している。著書は「国境を越えて来た」シリーズを全体的に「イコラ」(他)、上野大学、NHK、TBSテレビ「ワンダーモーニング」にコンパニオンとして出演。

日時 2023年 11月 12日 (日) 13:30～15:00 聴講13:00

会場 上野キャンパス F301教室 長野市上野2-120-8 講演終了後に書籍販売とサイン会を予定

【お申し込み・お問い合わせ先】 要申込 定員：先着250名

お申し込みはこちら

お申し込みはこちら

TEL 026-295-1325 open.college@seisen-jc.ac.jp 申込締切: 10/30 (月)

受付時間: 平日9:00～16:30 申し込みは先着順です。定員に達した場合は、早めにご予約ください。お申し込みは先着順です。

清泉女学院大学・短期大学 〒381-0085 長野市上野2-120-8 TEL: 026-295-1325 地域連携センター



(2) 出張講座

①こどもの人権と不適切な保育

幼児教育科 長谷川 孝子

数年前から「不適切保育」という言葉をよく聞くようになりました。この言葉は、厚生労働省「不適切な保育の未然防止及び発生時の対応についての手引き」（2021年）に「保育所での保育士等による子どもへの関わりについて、保育所保育指針に示す子どもの人権・人格の尊重の観点に照らし、改善を要すると判断される行為」と定義されました。その後2023年に子ども家庭庁が公表した「保育所等保育所等における虐待等の防止及び発生時の対応等に関するガイドライン」（不適切な保育を防ぐためのガイドライン）には、「不適切」という言葉の捉え方が曖昧であるということから、「虐待等と疑われる事案（いわゆる「不適切な保育」）と変更になっています。

この「不適切保育」という言葉は、最近では毎日のように聞く言葉になりましたが、しばらく前は、それほど聞きなれた言葉ではなかったと思います。短い間に広まり、今ではメディアを賑わすほどになりました。この言葉自体は、新しいですが、不適切保育そのものは今に始まったことではありません。医学博士/解剖学者の養老孟子氏は、「名前とか言葉をつけることにより、物事の認識が細分化されていく」と仰っています。それまでは意識されなかったようなことが、言葉を知ることにより、そのことに意識がフォーカスされるということです。子どもの人権や不適切保育は、これまでもっと取り上げなければならなかった問題だと感じていますが、それほど大きく議論されたことはなく、ここへきて考える機会が多くなったのは良いことだと感じています。それが高齢者向けの講演会のテーマにまでなったことに驚き、普段保育との接点が少ないであろう方々に、私の話は響くのだろうかとやや心配でもありました。当日は、50人ほどの参加だったでしょうか。ハイシニアの方が多く、ほぼ満席で前の方の席から埋まっていくという状況でした。いくつになっても熱心に学び続けておられる様子に小さな感動を覚えました。

おそらく、子どもの人権については、参加者のもつ感覚と今求められるものとの間にギャップがあったであろうと推察されます。自分たちが良いと思ってきたこと、それが当たり前だと思っていたことが、今「不適切」と言われかねないということは、戸惑いも大きいと思います。参加者から、「孫に何か言っても煙たられるだけで、どうすればよいかわからない」と声がありました。良かれと思って言ったこと、やったことが不適切などと言われては、いっそのこと全くかわらない方がよいのではないかとさえ思ってしまうでしょう。人権のことを学ぶことで、人との隔たりができてしまったり、どのように行動すればよいかわからなくなってしまうようではいけないといつも思います。子どもの人権を守ることに深く関わりのある保育関係者が適切に理解し、どうすることが子どもの人権を守ることにつながるのかを発信していかなければならないと思いました。

②音楽リフレッシュ～明日も笑顔でいるために～

幼児教育科 山崎 浩

本講座は「歌うこと」「生の音楽に触れること」を通して心身のリフレッシュを図る参加型の講座であり、「音楽と心の健康」について感覚的に理解していただきながら解説を加えるレクチャーコンサートでもある。依頼者の意図、ねらい、要望に沿って内容にバリエーションを持たせており、生きた音楽によって参加者の心身に直接働きかけることが重要であるため、アコースティック・ピアノのある会場で50名までの参加を条件としている。

高齢者講座、一般講座では、時代や季節を象徴する音楽を通じた回想、記憶の共有などをキーワードに、歌いながら聴きながら、受講者が心を動かす音楽リラックス体験がテーマ。同時に音楽を通して可能になる健康なリズム感覚への刺激、歌う事による腹式呼吸、咀嚼・嚥下に関わる機能への刺激等にも着目し、音楽の効用を心身の両面から体感し理解する。

子育て講座（託児付き型）では親が音楽を通して自分自身に向かい合う、リラックスタイムを提供する事がテーマ。

子育て講座（親子型）では、ゆったり子どもと触れ合ったり、歌ったり、あそびながら親子のひと時を音楽でサポートしている。

◆今年度実施した本講座は以下の通り

- 5月19日 千曲市戸倉公民館いきいき創造教室 主催：戸倉公民館 対象：高齢者
- 8月7日 中野市西部公民館すくのび学級 主催：中野市西部公民館 対象：未就園親子
- 10月26日 木島平村介護予防講座 主催：木島平村社会福祉協議会 対象：高齢者
- 12月16日 長野市古牧地区地域福祉大会 主催：古牧地区住民自治協議会 対象：一般
- 2月8日 小川村公民館おがわ熟年大学 主催：小川村公民館 対象：高齢者



2/8 おがわ熟年大学

(4) 生涯学習講座実施状況

公開講座会場別講座数・受講者数の推移（直近5年間）

		2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
講座数 (件)	長野県カルチャーセンター	21	0	0	0	0
	長野市生涯学習センター	18	0	0	0	0
	東口キャンパス	19	7	18	16	20
	上野キャンパス	20	2	7	3	10
	その他	3	2	4	0	0
	合計	81	11	29	19	30
受講者数 (人)	長野県カルチャーセンター	226	0	0	0	0
	長野市生涯学習センター	296	0	0	0	0
	東口キャンパス	192	63	135	168	255
	上野キャンパス	230	25	24	19	59
	その他	9	63	8	0	0
	合計	953	151	167	187	314

■映画上映会入場者数の推移 (人)

映画上映会		2019年度 (隣る人)	2020年度 不開催	2021年度 不開催	2022年度 (かば)	2023年度 不開催
	受講者数		123	0	0	64

■特別講演会受講者数の推移 (人)

講演会		2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度 安田菜津紀 氏
	受講者数					

①公開講座実績一覧

<春学期>

(人)

No	講座名	教員名	場所	実施日	参加数
1	歌って遊ぼう ～童謡・ふれあい遊び・やさしい合唱～①	池田 俊治	東口	5月20日	21
2	日本周産期・新生児医学会公認 新生児蘇生法講習会 スキルアップコース (NCPR Sコース)	上原 明子	東口	5月27日	6
3	日本周産期・新生児医学会公認 新生児蘇生法 病院前コース (NCPR Pコース)	上原 明子	東口	6月17日	5
4	笑顔を引き出す!! ユーモアコミュニケーション養成講座	塚原 成幸	東口	6月17日	13
5	歌って遊ぼう ～童謡・ふれあい遊び・やさしい合唱～②	池田 俊治	東口	6月24日	22
6	こころとからだの心理学 ～ストレスをうまくコントロールしよう～	寺門 正顕	東口	6月24日	25
7	ストリートチルドレンと呼ばれる子どもたち	小松 仁美	東口	6月24日	5
8	「考える」を考える	中島 琢郎	東口	7月23日	14
9	マーケティング入門 ～サントリー伊右衛門の成功事例～	中島 琢郎	東口	7月23日	7
10	睡眠の心理学	寺門 正顕	東口	7月23日	31
11	人々は何を想って唄ってきたか～アメリカン・フォークソングの世界～	中村 洋一	東口	7月30日	10
12	21世紀を生きる：グローバルな時代に何を学ぶか	中村 洋一	東口	不開講	-
13	コミュニケーションと思い込みの心理学	寺門 正顕	東口	7月30日	13
14	ラテン語入門①辞書の引き方・名詞	神門 しのぶ	上野	8月1日	5
15	ラテン語入門②sum 動詞・前置詞	神門 しのぶ	上野	8月2日	6
16	ラテン語入門③動詞・副詞	神門 しのぶ	上野	8月3日	6

No	講座名	教員名	場所	実施日	参加数
17	日本周産期・新生児医学会公認 新生児蘇生法 専門コース (NCPR A コース)	上原 明子 石川 智恵	東口	8月26日	13
合計				16講座	202

<秋学期>

(人)

No	講座名	教員名	場所	実施日	参加数
1	異文化理解を深めてみよう～深層文化を理解するための知識と手法～	村松 直子	東口	11月4日	6
2	心理職のための被害者支援研修①	岡本かおり, 他外部講師	東口	11月12日	18
3	心理職のための被害者支援研修②				19
4	21世紀を生きる：グローバルな時代に何を学ぶか	中村 洋一	東口	11月23日	5
5	人々は何を想って唄ってきたか～アメリカン・フォークソングの世界～	中村 洋一	東口	11月23日	7
6	ラテン語でクリスマスソング“Adeste”を歌いましょう	神門 しのぶ	上野	不開講	-
7	みんなで待ち望むクリスマス～クリスマスリースを作りながら、クリスマスの本当の意味を学びましょう～	稲葉 景	東口	12月9日	6
8	紙芝居でコミュニケーション！！かみしばい演者養成講座 2024	塚原 成幸	上野	2月3日	7
9	続・ラテン語入門①	神門 しのぶ	上野	2月5日	6
10	続・ラテン語入門②				6
11	続・ラテン語入門③	神門 しのぶ	上野	2月6日	4
12	続・ラテン語入門④				4
13	イースターって？ ～イースターの本当の意味とは？～	稲葉 景	東口	不開講	-
14	子育てコーチング	中島 琢郎	上野	3月7日	6
15	「考える」を考える	中島 琢郎	上野	3月7日	9

No	講座名	教員名	場所	実施日	参加数
16	ユーモア力アップしよう！笑顔マイスター養成講座	塚原 成幸	東口	3月9日	9
合計				10講座	112

②出張講座実績一覧

No	テーマ	教員名	主催団体	実施日
1	音楽リフレッシュ	山崎 浩	千曲市戸倉公民館	5月19日
2	笑顔で築くユーモアコミュニケーションのすすめ	塚原 成幸	長野県生涯学習推進センター	6月19日
3	ふまねっと体操	上野 里美	長野市老人クラブ連合会	7月14日
4	睡眠の心理学	寺門 正顕	シニア大学長野支部	8月2日
5	音楽リフレッシュ	山崎 浩	中野市西部公民館	8月7日
6	紙芝居昭和史～かみしばいを知ると懐かしい昭和の世相が見えてくる	塚原 成幸	長野市篠ノ井老人福祉センター（かがやき広場篠ノ井）	8月29日
7	音楽リフレッシュ	山崎 浩	木島平社会福祉協議会	10月26日
8	ストリートチルドレンと呼ばれる子どもたちとその支援	小松 仁美	大豆島地区住民自治協議会	11月12日
9	ジェンダーへの理解と本人への理解	稲葉 景	更北地区住民自治協議会	11月18日
10	睡眠の心理学	寺門 正顕	中野市人権・男女共同参画課	11月28日
11	子どもの人権と不適切な保育	長谷川孝子	小川村教育委員会 小川村公民館	12月10日
12	音楽リフレッシュ	山崎 浩	古牧地区住民自治協議会 福祉部	12月16日
14	睡眠の心理学	寺門 正顕	かがやきひろば篠ノ井	2月8日

No	テーマ	教員名	主催団体	実施日
15	音楽リフレッシュ	山崎 浩	小川村教育委員会 小川村公民館	2月8日
16	紙芝居昭和史～かみしばいを知ると懐かしい昭和の世相が見えてくる	塚原 成幸	小川村教育委員会 小川村公民館	2月22日
17	紙芝居昭和史～かみしばいを知ると懐かしい昭和の世相が見えてくる	塚原 成幸	中野市北部公民館	2月29日
合計				17 講座

3. 地域活動部門活動報告

塚原 成幸

地域活動部門は、主にボランティア活動（イベント参加を含む）と地域との交流活動が中心となる部門である。

ボランティアに関しては、地域からのボランティア依頼受付・学生への情報提供（メール配信・掲示ほか）・募集・実施・報告書提出など、地域と学生をつなぐ総合窓口としての役割を担っている。また、学生の地域活動支援として、①ボランティア保険の加入、②Let'Try ボランティア支援制度（後述）、③単位認定に関する業務、④活動についての相談窓口など、学生が安心して活動に参加できる支援や体制を整えている。

ボランティア活動は、建学の精神に基づいた活動として、多くの学生が関心をもっており、全学的に活発とはいかないまでも、年間を通じて一定数のボランティアを派遣してきた。

近年の動向としては、令和二年度（2020）以降、混乱が継続した新型コロナウイルス感染症の影響を受け、約三年間は様々な制限を受けてきたが、今年度は感染症の見直しも行われたため、様々な制限があった社会活動が再開された年度であった。

一度落ち込んだ活動を立て直すことは容易なことではないが、本センターが取り組む各種の講座やボランティア活動も賑わいを取り戻し、明るい兆しを感じることができた。



テレビ信州「24時間テレビ」街頭募金活動



車いすマラソン大会

(1) ボランティア活動報告

ボランティア活動報告①

人間学部 文化学科 2年 T.A.

このレポートでは、2022年6月から2023年3月末にかけて私が行った学外でのボランティア活動について、ボランティア活動の報告と感想をまとめる。

ボランティアは大きく分けて二か所で行った。まず、2022年6月から2023年3月まで、市内の地域連携センターで紹介された学習チューターのボランティアを行った。ボランティアの活動先は長野市立吉田小学校で、内容としては主に小学校の6年4組の学習支援、該当クラスの外出行事がある場合は支援学級と5年2組の学習支援を行った。毎週金曜日の半日または全日の間、クラスのチューターとして担任の行う授業についていくことが難しい児童に対して勉強のアドバイスや、児童の学習態度修正の支援、担任の行う丸つけのサポートなどを行った。この活動を通して、約1年間にわたって卒業を控えた児童と継続的に関わることで、児童の精神的・肉体的な成長に注視しながら活動を行うことができた。時間割の関係で算数と理科の学習支援が多かったが、回数を重ねるにつれて特に算数の授業では児童から話しかけてもらう機会が増えた。

また、授業時間外にも積極的にコミュニケーションを取り合い、休み時間には一緒にトランプなどで遊んだ。子供たちの好みや趣味を知るいい機会になり、学びにもつながった。自分とは年齢の離れた子供たちとの関わり合いは初めての経験であった。丸つけの手伝いでは、児童個人個人の学習の状況を把握するよい機会になった。初めて小学校へ向かうときは緊張よりも期待に胸を膨らませた感情のほうが大きかったが、回を重ねるごとに幼い子供たちとかかわることに対する大きな責任を感じ、慣れの間を感じつつも緊張感を持ったボランティア活動となった。また、子供たちに名前を覚えてもらい、さらに名前で呼んでくれた時に大きな喜びを感じた。児童らが卒業を控え、自分自身も年間のチューター活動を終える目前、児童らが中心となり卒業制作としてモザイクアートの製作を行っていた。クラスで最後の大きな制作だったので寂しい思いもあったが、ずっと6年4組のそばにいた分、児童同士が声を掛け合ったり自ら動いたり、彼らの成長を最後の最後にひしひしと感じ感動した。スケジュールの都合でモザイクアートの完成作品を見ることはできなかったが、のちに児童らから無事に完成したことを聞いた。

1年にも満たない短い時間であったが、子供たちと過ごした時間は宝物ともいえる経験であり、今後の学生生活や社会人としての生活で子供と関わる時やコミュニケーションが必要とされる時に活かしたいと思った。

そして、2023年1月末から2月初めにかけて、第20回長野灯明まつりの運営ボランティアを行った。長野灯明まつりとは、1998年に長野でオリンピックが催されたことをきっかけにそのオリンピックレガシーを継承し、2004年から弛まぬ平和への願いを再び世界へと発信するために開

催されたイベントである。善光寺本堂がオリンピックにちなんで五色にライトアップされるほか、周辺の鐘楼・梵鐘や山門などもライトアップされる。

また、灯籠に飾る切り絵を募集するゆめ灯り絵コンテストも催されており、私は主にそのゆめ灯り絵に関連する作業を行った。はじめの2日間で、灯明まつりに展示される灯籠に出展者の作った切り絵の差し込み作業を行った。主に小学生が作った切り絵やゆめ灯り絵展に出展された切り絵を、四角柱型の灯籠の四面のうち二面に補強板とともに差し込み、残りの二面には灯明祭りの広告紙を差し込んで完成とした。長野市を中心とする数十校の小学校の児童の切り絵を差し込むため、他のボランティアの方と協力しながら時間をかけて丁寧に作品を扱った。後半の2日間では、実際に灯明祭りの会場であった善光寺周辺で会場整備の業務にあたった。1日目は雨と雪が降っており、足元も悪い状態であったが、城山公園内に設置されている数百の灯籠の一台一台の中にランタンを設置する作業を行った。灯籠は木でできているため水を含むと質量が重くなり、気温も低かったため作業は体力的にかなり苦痛を伴った。他にも、灯籠に積もった雪を取り除く作業も行った。そして灯籠は毎日ランタンを取り出す必要があるため、消灯時間の9時を回った頃にランタンの撤収作業も行った。平日であったため、善光寺から少し離れた距離にある城山公園に足を運ぶ人は少なかったが、来場者の方々が「綺麗だ」と言ってくださるのがとても嬉しく、活動のエネルギーとなった。2日目は天候も良好で、休日ということもあり多くの方が来場する日であった。2日目も1日目と同じくランタンの設置と撤収作業を行ったことに加え、城山公園のそばの信号付近のテント内でインフォメーション業務も行った。灯明まつりに関してお困りのことがある方に向けて案内を行ったほか、イベントの案内、パンフレットとポスターの配布、アンケートの声掛けを行った。実際に落とし物をされた方にご案内をしたり、2日目に行われたイベントであるスカイランタンの会場のご案内をした。またスカイランタンが行われることから、来場者が多くなる見込みがあったため、インフォメーションのテント前や城山公園そばの信号のあたりで灯明まつりのパンフレット冊子やポスターの配布を行った。

一人一人に声を掛けつつお渡しするのは今までに経験したことがないので、貴重な経験だった。また、灯明まつり本部が用意したアンケートフォームへの回答をお願いする活動も行った。アンケートは相手に時間を要してしまうものなので快く答えてくれる方は少なかったが、やはり貴重な経験になった。数は少なかったがアンケートに答えてくれる方の優しさに元気づけられながら活動を行うことができた。

以上のことから、小学校での学習チューター活動では、小学生との関わり方、児童の学習の支援、小学生の活動の支援を通じて、異世代間でのより良い関わり方や児童の好みや性格の把握、一人一人に合わせた有効的なコミュニケーションの取り方について学ぶことができた。今まで子どもたちと関わる機会はあまりなかったので、新鮮な体験であったのと同時に、現在の小学校の学級の状況や支援学級の児童とのかかわり方を実際に日常的に行っている教員から直接学ぶ良い機会になった。教員の方々から関わり方のアドバイスを貰ったり、関わる中で改善点をまとめたりする中で、次第に良いコミュニケーションの取り方を学ぶことができた。そして長野灯明まつりの運営ボランティアでは、重労働の作業ではありながらも時間をかけて作り悪天候の中設置し

た、数百もの灯籠を喜んでくださる人との出会いで心境の変化があり、貴重な体験を通して様々な喜びを感じた。

ボランティアを行わなければ無かった出会いや関わりで、心理的な成長が大いにあったと感じられる。また、長野市で様々なイベントを開催している長野商工会議所の方々の動きを一連のボランティアを通して見ることで、イベントを開催する上で主催者側がどう動くべきか、また、来場者や外部から参加するボランティアに対してどのような対応をするべきかなどの適切な対応に対する迅速さと正確さに大変驚いた。学生としてボランティアに参加出来る期間はさらに短くなっていくため、学生目線での貴重な体験をすることができた。今後も様々なボランティア活動に参加し地域に貢献するとともに、個人の成長にも繋げたいと考えている。

ボランティア活動報告②

人間学部心理コミュニケーション学科 1年 T.M.

活動のきっかけ

自分の身近にボランティア活動をしたことがある大人がおり、幼いころからその経験談を聞く機会があった。そして、高校生のころから何度かボランティア活動に参加した。このようにボランティア活動にはすでに興味関心があった。しかし、本格的に行動を始めたのが高校二年生だったため多くの活動に参加することはできなかった。そのため時間のある大学生のうちにやったことのない、やってみたかった、そして様々なボランティア活動に身を置いて、学びたいと大学入学前から思っていたから。加えて単位認定されると知り益々頑張ってみようと思った。

活動内容の前に

特にやりたいと思っていたボランティアの種類は、地元である長野に関わりがあること。例えば地元のスポーツチームの試合スタッフや地域のイベントスタッフなどだ。今までは客としてその場にいることが多かったため、ボランティアさんがいることも知っていた。それは大変ありがたいことであると年齢を重ねる度に感じるようになっていた。ときには友達や身内も誘ってボランティアをし、ボランティアの輪を広げること、それによって自分の居場所をもう一つ作ることも目標であった。

活動内容及び感想

活動内容は AC 長野パルセイロの試合の運営と 24 時間テレビの募金活動の 2 つ

・ AC 長野パルセイロ

入学して間もない四月上旬に、かねてよりやりたいと熱望していた AC 長野パルセイロのボランティアに参加。これが今年度初のボランティアだった。意気込んで行ったものの知り合い

は誰一人いない。そこに飛び込んでいったため初めのうちは緊張と、自分が初参加ということ
を過剰に意識してしまい、肩身が狭かった。しかし、ミーティングの時点で現場の運営スタッ
フさんとボランティアの方たちがしっかりとコミュニケーションがとれていたため、雰囲気
が良く、すぐに馴染めそうだと思えた。ベテランのボランティアさんが多く、業務について優
しく教えてくださったり、自分の親世代以上の方が多く全体的に面倒をみてくださったりした。
また、より多くのボランティアの方と仲良くなりたいという想いもあり、自分からコミュニケ
ーションをとるように心がけた。そのため、気まずい時間がなく、自分が考えていたよりも早
い段階から馴染むことができた。

初参加時の業務内容は荷物検査。パルセイロの試合を見に来たサポーターさんがスタジアム
に入る際に行うものだ。私は何度も試合を観に来たことがあったため、仕事内容は粗方知って
はいた。しかし、いざやってみると初めは大きな声での声かけができず、ベテランの方に助け
てもらってばかりだった。暫く続けていくうちに声かけもしっかりとできるようになり、一人
ひとりのサポーターさんに丁寧な対応ができていたと思う。次第に働く喜びが生まれた。

一回目のボランティア後に感じたことは、何事も経験と覚悟と勇気が必要。やる気だけでは
どうにもならないことも多いが、相手の立場に立って考えること、慣れに流されないで心を込
めて対応することの大事さに気づかされた。また、ボランティア仲間のことも互いにある程度
知っていると円滑に事が進められるのではないかと思った。そして、コミュニケーションの大
切さを改めて感じた。また、このボランティアが大変楽しかったため、次回行くことが日々の
楽しみになった。この時には単位がとれるからボランティアを頑張ろうという気持ちはなくな
り、純粋にやりたいからやろうという気持ちでいっぱいになった。

パルセイロのボランティアの回数を重ねる毎に重要な役割を任されていき、その事も嬉しく、
続ける要因になった。多くのボランティア仲間の方とコミュニケーションをとり、年齢関係な
く仲良くなれた。元々はサッカーを観ることが好きでサポーターとしてパルセイロに関わっ
てきた。しかし、今は一ヶ月に2回ほどあるホームでの試合を観に行きたい気持ちもあつたがボ
ランティアの楽しさに取りつかれていたので、迷わずボランティアすることを選ぶようになって
いた。予定も最優先。そして、新しくボランティアをやってくれる方に教える立場にもなっ
た。上手に教えられる自信はなかったが、コミュニケーションを積極的にとることは大事にし
たかった。自分よりも年上の方に教える時が特に難しく、偉そうに聞こえないように言葉を選
ぶのが大変だった。反省点もあるが何事も経験だと実感した。反省点は次に活かしたい。

コミュニケーションについて無意識に学べるいい現場だった。この事からベテランのボラン
ティアの方たちが、たとえチームの状況が思わしくなくてもやり続ける所以がわかった気がす
る。5月から接客業のアルバイトを始めた私にとって、ここでの知らない人と話す経験は役立
ったと思う。今では相乗効果でボランティアの時もアルバイトの時も上手にお客さんに対応で
きるようになったはずだ。去年の自分と比べてコミュニケーション能力が格段に上がったと自
負する。なぜなら、私は幼い頃から人と話すことが好きだった。それに加えボランティアをし
たことで積極性が増してどんな年代の人とも話せるようになった。

・24時間テレビ

まず、毎年楽しんで見させていただいている、夏の風物詩の様な番組に関わることができてとても光栄でした。募金活動は経験がある。高校生の時校内でやった。しかし、その当時周りの目を気にして募金しにくそうにしている人を見かけ、募金活動の難しさを感じた。募金は、してくれる人の気持ちが一番大事であるため、強要はもってのほかであるし、呼びかけもほどほどにすべきだと私は思っている。という訳で今回も不安を抱えたまま参加した。しかし、スタッフさんは気さくな方で、コミュニケーション力を学びたいと思わせられた人であったし、直接的な募金の呼びかけはせず、募金をしてくださった方に対して感謝を示す事が主な仕事だったため、心配は杞憂に終わった。

一緒に活動したメンバーは全て清泉の学生だったため、横の繋がりが形成しやすかった。このボランティアでは、特に人の温かさに触れることができた。一年かけて貯金箱に貯めてきてくださった方、金欠と言いながら募金してくれた通りすがりの高校生、財布の中にある小銭を残らず募金してくれた方。真夏日の外テントでの活動だったため、飲み物を差し入れてくれた方、東急の前での活動だったため、休日なのにプライベートで来てくださった東急の社長さんなど。本当に多くの方から気持ちを頂きました。心洗われるようでした。この世の中は思っていたよりも優しく、嫌なことばかりではないとハッキリと感じた。今回も知り合いとの参加ではなかったが、ボランティアで出会った人とコミュニケーションをとり、仲良くなれば良いと思っていた。それがかなってよかった。

ボランティア活動全体を通して

人と関わる事が更に好きになった。また、自分がやりたいと思っていたボランティア活動ができたことが最大の喜びであり、これからも是非とも続けていきたい。自分がやりたくてやっている事が人の役にも立っていることも素晴らしい事だと考える。そのため、これからも謙虚に活動していきたい。また、私がボランティアをしていることを知って、友達も興味を持ち、自ら一緒にやろうと誘ってくれた。このように自然とボランティアの輪が広がっていることと、それにより目標が達成できたことがうれしい限り。かつては将来自分が働いているイメージが湧かなかったが、少しずつ見えてきた気がする。自分らしさも見つけることができた。それもボランティア活動のお陰だと思う。ひとつもマイナスな感情が浮かばなかった。

ボランティア活動報告③

看護学科1年 K.M.

1. はじめに

私は社会の数多く存在するコミュニティに興味を持ち、ボランティアという形でそこで営まれる生活の一部に参加させてもらった。今回は各コミュニティの様子とそれらを踏まえた考察を述べる。

2. 参加した活動

- 1) 長野市障害者スポーツ大会
- 2) 災害公営住宅への訪問
- 3) 外国人住民のための防災教育
- 4) 自然の森 ネイチャーセンター (ジュニア、キッズ)

3. 感じたこと

1) 障害者スポーツ大会

身体機能や知能等に制約がある人達が出場する運動会。非常に失礼ながら淡々と進む暗い大会になるのではと思っていたが、通常の大会よりも声援が飛び交う笑顔あふれる大会だった。ここでは一人一人が自分の力を発揮してやりきることを目標に順位に関係なく自分の力を最大限に発揮した競技が行われていた。障がい者という言葉で大変な人達だから理解を示してあげなければなどと思って行動していた自分が浅ましく思え、日常生活の中で自分でも気付かないうちに彼らを傷つける言動をとっていたのではないかと考えるようになった。「障がいを彼らの個性と捉えるべき」とは言われることがあるが、看護学生以前に人として、慈悲や施しではなく本当の意味で捉えられるようになりたいと決意を固められる機会となった。

2) 災害公営住宅訪問

災害公営住宅の老人会に参加してきた。ここに住んでいる人の多くは長沼・赤沼の台風19号によって自宅が被災しここに引っ越した人だと教えてくれた。老人会の参加者には元気に生活している人から身体機能の低下に伴い生活行動が制限される人まで様々な人がいた。私が担当した2人の70代女性は一方が活発な人で積極的に会話をする人で、もう一方は耳が不自由であったが、耳が不自由な女性は会話に入れず目に薄く涙を浮かべて俯いていた。これらは耳が不自由で聞き取れないため会話に入れず場から取り残されたという感覚と、耳が聞こえにくい自分を不甲斐なく感じるという感情などから生まれた反応だと推察する。そこで他の人との会話の合間に目を合わせながらはっきりとした口の動き、聞き取りやすい声で話したり、手や腕をさすりながらのコミュニケーションなどを心がけると少しずつではあるが話しかけてくれるようになった。

反応が好転したという事はこの対応は良策ではあったのだろうが最善策であったとは限らない。人に触られる事を良しとしない人はいると思う。もしかすると本当は嫌だったけれども「良くしてもらっているから」と気を遣わせてしまった可能性もある。今となっては彼女の心情を知る事はできないが、今後の大学学習や生きていく中で人の心を理解する方法や寄り添い方を身につける事を課題に学習を進めていきたい。

3) 外国人住民のための防災教室

様々な理由で日本に滞在している在日外国人に対し防災や緊急時の対応講座のお手伝いをした。今まで日本には人種差別はないものと思っていたが必ずしもそのような事はなく、

私達が認識していないだけで、日本語を母国語としない人達特有の悩みがある事を知った。外国人と接する機会が少ない日本では常識やルールのようなものが目に見えない形で一律的に形成されており、近年増加し始めた外国人の存在を自分達日本人と同じように受け止める事ができずにいるという印象を受ける。外国人が言語の壁、見た目の壁、文化や常識の壁など日本で生活する中で理解されない場面も多々あると推察する。

今回の講座で社会的な問題であると感じたのは BLS(basic life support)での活動内でのことだ。

BLS では救命活動のために被救護者の衣服を脱がせる必要のある場面がある。救助者が日本人ならば周囲に説明し理解、協力を得る事が可能だ。しかし、外国人となると日本語が分からず周囲の協力を得られず救命活動に支障をきたすばかりか、見た目の偏見から外国人が日本人に暴力をふるっていると誤解され、通報される恐れがあるなど弊害がある。外国人だからという理由だけで差別することがあってはならない。原因としては、島国の日本では外国人と交流する機会が少ない点、外国人の気性は荒いなどの先入観があり正しい外国人理解が進んでいない点、人間は自分の知らないものに対し恐怖し排除する傾向がある点等が挙げられる。対策として公的機関では今回のような外国人を対象としたセミナーや 119、110 の他言語翻訳通話等が導入されている。今後は公的機関だけでなく民間での変化や外国人への意識変化も必要だ。そのためにはいろんな人がいるという認知と理解の機会が必要不可欠だと考察する。

4) 自然の森 ネイチャーセンター

i. センターの存在意義

学校でも家庭でもない第3の場所。学校が好きで活発に活動している子もいる。一方で参加している子供の中には学校でうまくいっていない子もいた。学校でうまくいく、いっていないに関わらず学校外での自分を表現できる第3の居場所があることは子供たちにとって大きな支えになると思う。学校に居場所がない＝社会との関わりが断たれている。という状態にならないようにすることが子供たちの安心した成長に繋がるとも考えられる。

また、さまざまな年齢の子供が集まる集団での活動というのも魅力的な点だ。

例えば社会進出後の4歳差は大した差ではないと捉えられるが、彼らにとっての4歳差は遊ぶことが仕事の幼稚園生と授業により学習を獲得する小学生、帰属し受け身型の学校生活を送る小学校低学年と企画運営側の小学校高学年、私服など比較的自由な学び舎の小学生と制服や高速により社会性を身に着け始める中学生、(中学生 社会の中での自己の確立)にそれぞれの年代では求められる役割が大きく異なる。このように集団内での自分の役割を探ることができ、役割獲得までの過程は子供たちの社会性を育む貴重な機会であるといえる。

ii. 子供の発想力の可能性

接していて大人と子供の違いについて創造物へのこだわりがあった。大人は創造物が完成すればいいと考えていると感じる。稀にこだわる観点としては丈夫性、安定性、左右対称

性を気にかける。一方、子供達は色のグラデーションや創造物の形や物に意味をもたせて物語をつくることがある。例えば、ピザを作る時に食材で顔を作ったり、生地をハートにするなどだ。これらから子供達の自由な発想力が伺える。これらの力を培うには何もないところから自分に必要な道具を集めてきて自分が発想したものをつくるという行為が必要だ。発想した物の実現可能性の有無を考えずに挑戦してみる。そして失敗しても何度でも続けていく。大人からするともしかしい気もするが子供達は回を重ねるにつれいつの間にか成功させ、ユニークな物を造り出している。

iii. 大人の役割

私達大人に求められているのはそんな子供達の想像力を阻害しないこと、そして想像力を更に伸ばすことができるようにサポートすることであると考えている。具体的には「そんなことできるはずがない」と頭ごなしに否定するのではなく「面白いアイデアだね。どうするの」「どうやるの」など肯定した上で次に繋がる質問をして子供達自身に考えさせる機会をつくることだ。自身で考えるからこそ発想力を培うことができる。また、想像を実際つくる過程で人と協力する力をつけることができる。一人でできない場合は「自分は今これをつくっているが一緒につくらないか」と他の人を誘ったり、逆に創作物に惹かれ周りに周りに人が集まってくる場合もあり協力した創作活動が望める。創作途中でコミュニケーションを取りながら作業することでより多くのアイデアが集まり、取り入れの有無や役割分担などの話し合いが展開される。これらは思考力を働かせて子供達の想像力、創造物を培うという影響を与える。

iv. 私の立ち位置

自分の立場からすると参加させてもらっているボランティアだが、相手(子供達)からすると職員、実行側、先生にあたる。この関係には私の責任感の認識という点で自覚が足りていなかったと回を重ねるごとに感じた。相手は自分の視点で私を先生として頼ってくる。この時、相手の意見を無下にしないことが必須だと感じた。無下にすると信頼関係が崩壊する。一度崩壊した信用の再構築は困難だ。子供と大人とでは社会的な生活範囲が大きく異なり、関わる大人は限られてくる。先生という立場にある人種は子供たちに多大な影響力がある。そのことを自覚した言動をするべきだと感じた。

4. まとめ

どのコミュニティにも特有の学びや存在意義があり参加したからこそその内部でしか感じられない学びや気づきが数多くあったよい機会となった。今回の機会を感じたことを忘れず考察を重ね学習面だけでなく生き方、在り方にも生かしていきたい。

(2) Let's Try ボランティア活動支援

地域連携センター

本事業は、学生の自主的な地域活動を支援する目的で作られた事業である。学生が企画・実施する活動、または地域の団体や人々と協働で行う地域活動が条件である。募集を行い、希望する個人または団体が応募、地域連携センターにて審査する。採択された活動には、活動費の一部を支援している。

今年度は以下の活動が採択された。

- ① 活動名： 『チャイルドライン ながの』受け手ボランティア
内 容： チャイルドラインながのでの「受け手ボランティア」の養成講座の研修を受け、実際に子どもたちの相談を受けるボランティア活動をする
連携団体： NPO 法人ながのこどもの城いきいきプロジェクト
チャイルドラインながの

- ② 活動名： SEISEN ひょうしぎの会
内 容： 秋学期を中心に2～3回程度、長野市の子育て支援施設「じゃんけんぼん」などを訪問し、おはなし会を行う。
連携団体： こども広場・じゃんけんぼん等

Let's Tryボランティア活動報告①

活動名：『チャイルドラインながの』受け手ボランティア

代表者：心理学科3年M.H

活動メンバー：心理学科3年 A.R.、 I.S.、 M.M.

実施期日 2023年9月9日～2023年12月9日（以降は月2,3回シフト入り）

活動場所 もんぜんぷら座8階

活動内容

全10回の講座を受講した。講師には、チャイルドライン推進協議会長、公認心理師、産婦人科副院長、大学院教授、大学教授等からお話を伺った。ヤングケアラー、LGBTQ、虐待、不登校などについて、それらを専門としている方々から学ぶことができた。また、ペアになって相談のロールプレイを行った。講座受講後は、インターンシップとして実際の相談現場を見学し、電話相談の受け手としてボランティア活動を行った。

成果

養成講座を受講し、子どもたちが置かれた環境や社会問題などについて知ることができた。悩みを抱え苦しむ子どもたちのために、どんなことができるか悩んだ結果、自分にできる精一杯のことをしたいと感じた。

対面での相談とは異なる電話相談ならではの難しさを経験した。表情から相手の感情を読み取ることができないため、気持ちを汲み取れているのか不安がある。また、チャイルドラインは匿名であるため継続した支援が難しい。虐待や性被害の相談を受けても、こちらから直接支援することができない。相談者がその後どうなったかわからない不安もある。こんな声がけをすればよかった、あの言葉は正しかったのかと思悩むことが多い。しかし、活動を続けていくうちに、これだけは全員に伝えたいと思うことができた。それは「お話を聴かせてくれてありがとう」「また掛けてきていいからね」という言葉である。電話を掛けて助けを求めたその勇気を決して無下にはしたくない。支援の糸口を途切れさせてはならない。そのような思いを、このボランティアを通して強く感じるようになった。

受け手を始めてみて、子どもたちが電話を掛けてくる理由は悩みだけでないことを知った。話を聴いてほしい、漠然とした不安を和らげたい、疑問の答えが欲しいといった主訴も多かった。チャイルドラインは、悩みの有無に関わらず子どもたちの話を何でも受け止める姿勢を大切にしているのだと分かった。その活動に関われたことをとても嬉しく思う。

相談者からの「聞いてくれてありがとう」という声が、受け手を始めて良かったと思えた。今後も、受け手ボランティアとして活動を続けていきたい。

Let's Try ボランティア活動報告②

団体名：SEISEN☆ひょうしぎの会

活動名：子育て支援 じゃんけんぽんでのおはなし会

代表者：幼児教育科1年 K.M

活動メンバー：幼児教育科1年 O.R、O.S、O.K、K.M、Y.F.

実施期日

2023年12月2日（土）13：00～15：00

2024年1月27日（土）13：00～15：00

活動場所 こども広場じゃんけんぽん 長野市新田町 1485-1 もんぜんぷら座 2階

活動内容 SEISEN ひょうしぎの会によるおはなし会（手遊び、紙芝居の実演）の開催



成果

子育て支援センターの事業に参画することで、親子のリフレッシュを促すことができました。また、現場の雰囲気学ぶことで、学生自身が保育者として必要な知識・技術を得ることができ、実習に向けて自信がつけました。

訪問先からのコメント

ひょうしぎの会の皆さん、とても堂々として立派な表現でした。

1年生?!とスタッフも感心していました。

紙芝居の選び方も考えられていると思いましたし、子どもたちを飽きさせないように手遊びや小道具など用意していただき、集まった親子も釘付けでした。

感想をスタッフそれぞれからも伝えさせていただきました。

同じ内容でもいいので、是非また来てほしいとスタッフからの言付けです。

ありがとうございました。

特定非営利活動法人 ながのこどもの城いきいきプロジェクト

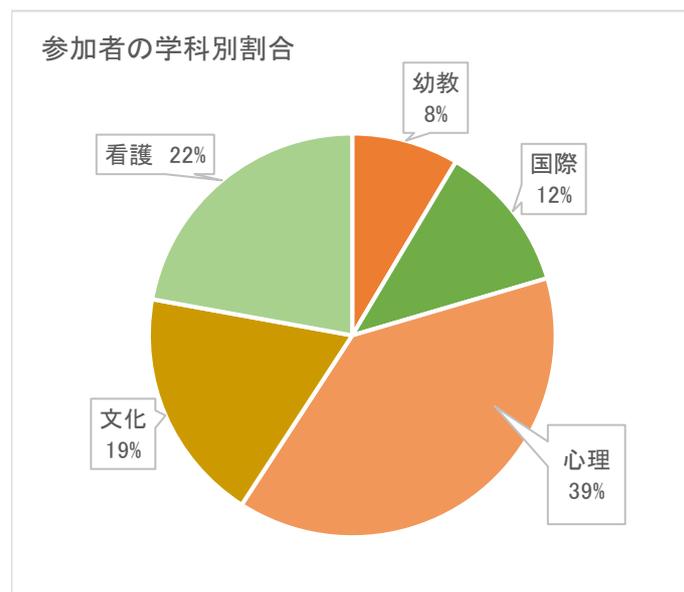
(3) 2023 年度ボランティア活動参加状況

2023 年度ボランティア参加人数集計

(学科学年別年間参加延べ人数)

(人)

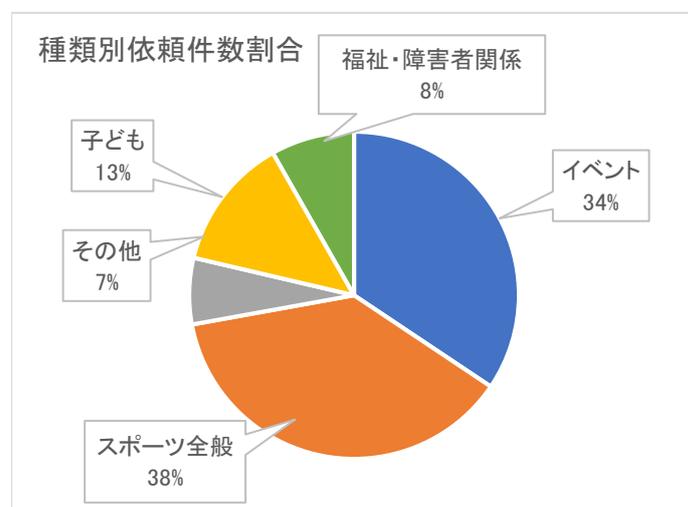
所属	参加延べ人数	学科合計
幼教 1 年	4	20
幼教 2 年	16	
国際 1 年	20	28
国際 2 年	8	
心理 1 年	42	91
心理 2 年	34	
心理 3 年	13	
心理 4 年	2	
文化 1 年	28	44
文化 2 年	10	
文化 3 年	5	
文化 4 年	1	
看護 1 年	45	52
看護 2 年	6	
看護 3 年	1	
看護 4 年	0	
合計	235	235



◆ ボランティア種類別状況

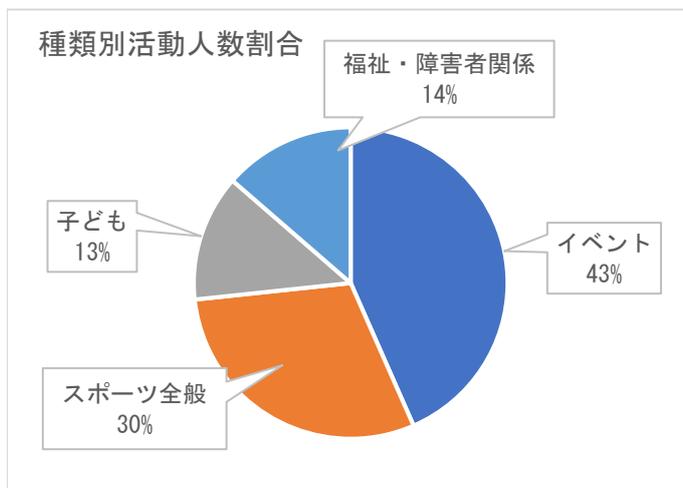
<活動依頼件数> (件)

区分	件数
イベント	21
スポーツ全般	23
その他	4
子ども	8
復興支援	
福祉・障害者関係	5
合計	61



<活動人数> (人)

区分	延べ人数
イベント	96
スポーツ全般	66
子ども	29
復興支援	
福祉・障害者関係	30
その他	14
合計	235



ボランティア活動参加人数推移

(人)

所属	2018年度		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度		2023年度	
	活動人数	学科合計										
幼教1年	119		204		108		113		9		4	
幼教2年	73	192	152	356	11	119	13	126	2	11	16	20
国際1年	77		56		60		41		18		20	
国際2年	10	87	37	93	7	67	13	54	2	20	8	28
心理1年	182		62		57		33		19		42	
心理2年	31		98		15		28		4		34	
心理3年	33		22		11		12		8		13	
心理4年	8	254	43	225	1	84	7	80	9	40	2	91
文化1年	9		7		31		5		23		28	
文化2年			12		4		4		13		10	
文化3年					7		4		2		5	
文化4年		9		19		42	1	14		38	1	44
看護1年			43		21		76		21		45	
看護2年					2		13		5		6	
看護3年				43		23	3	92			1	
看護4年									26		0	52
合計	542	542	736	736	335	335	366	366	135	135	235	235

(4) 2023 年度 ボランティア活動実績

(人)

	名称	実施日	幼教	国際	心理	文化	看護	総計
1	長野車いすマラソン大会	4月22日	1		2			3
2	第25回長野マラソン	4月23日	1	2		2	2	7
3	第54回長野市障がい者スポーツ大会	5月21日	1	1	5	1	7	15
4	第32回長野地区障がい者スポーツ大会	6月4日	1		4			5
5	長野パルセイロ試合	4月2日				2		2
6	長野パルセイロ試合	4月9日			3		2	5
7	びんずる市①	5月13日	3				1	4
9	キッズ・サーキット in 佐久	8月 4~6日				1		1
10	小布施見にマラソン	7月16日	5		1			6
11	学習チューター	通年			10	2		12
12	長野パルセイロ試合	4月30日			1	2		3
13	長野パルセイロ試合	5月13日	6		4	1		11
14	長野県警察大学生ボランティア	6月2日			5	1		6
15	第10回関東甲信越フロアホッケー競技大会	6月17日					2	2
16	びんずる市②	6月10日			2			2
18	若槻児童館小学生宿題サポート	通年			1	1		2
19	長野パルセイロ試合	6月11日			1			1
20	はれるや縁日 version2023	8月19日			1	2		3
21	長野びんずる祭り	8月5日				6		6
22	長野パルセイロ試合	6月18日			1			1
24	長野パルセイロ試合	7月1日			4		1	5
25	こっこマルシェ	9月5日	1		1			2
26	24時間テレビ街頭募金活動	8月27日		1	7			8
27	びんずる市④	8月12日		1	1			2
29	ひかる翼 Child project	7月30日	1					1
30	長野パルセイロ試合	7月29日			1			1
31	リレーフォーライフジャパン 2023	9月9日					2	2
32	長野パルセイロ試合	9月2日		1	1			2

	名称	実施日	幼教	国際	心理	文化	看護	総計
33	びんずる市⑤	9月9日				1		1
34	長野パルセイロ試合	9月23日			1		2	3
35	びんずる市⑥	10月14日				3		3
36	災害から学ぶながとよマルシェ	10月21日		1	5	1	3	10
37	なかのフェスタ	10月1日			1		2	3
38	長野パルセイロ試合	10月8日			1			1
39	国際交流ボランティア	10月13日		6	2			8
40	長野パルセイロ試合	10月22日				1		1
41	長野パルセイロ試合	10月29日						0
42	びんずる市⑦	11月11日			4			4
43	障がい者施設やどりぎ クリスマス会の準備	11月～1月			3		1	4
44	ザワメキアート展	12月7日 ～25日		4	1	6	3	14
45	長野パルセイロ試合	11月19日		3	1	1		5
46	長野パルセイロ試合	12月2日			1			1
47	長野灯明まつり (切り絵の差し込み作業)	1月20日				1	2	3
48	長野灯明まつり (切り絵の差し込み作業)	1月21日		2	2	1	1	6
49	長野灯明まつり (運営ボランティア)	2月9日				3		3
50	長野灯明まつり (運営ボランティア)	2月10日		2	2			4
51	長野灯明まつり (運営ボランティア)	2月11日			1			1
52	長野灯明まつり (運営ボランティア)	2月12日			1			1
53	長野灯明まつり (撤収作業)	2月18日			2	1		3
54	2024 クリスマスマーケット	12月15日 ～25日		1	1	3	14	19
55	遊びで育てるパパママ教室	2月3日			2		4	6
56	ゆうがた Get プレミアム	2月10日					2	2

	名称	実施日	幼教	国際	心理	文化	看護	総計
57	長野パルセイロレディース試合	3月3日		2	1			3
58	長野パルセイロ試合	3月9日		1	1		1	3
59	長野パルセイロ試合	3月13日			1			1
60	長野パルセイロ試合	3月20日			1			1
61	長野パルセイロ試合	3月30日				1		1
	合計		20	28	91	44	52	235

クリスマスマーケットボランティア



ゆうがた Get プレミアム